

平成31年度(令和元年度)の管理運営状況(東京都多摩障害者スポーツセンター)

(R2. 7. 31)

大項目	項目	特にアピールしたい点、改善点等
施設運営の基本姿勢とその具体化	サービスの提供の考え	①第三期指定管理の4年目にあたり、指定申請書の記載事項などを踏まえ、施設の効率的な運営と利用者支援の充実の為、利用者のライフステージ・ライフスタイルにあったサービスの充実に努めた。また、広域スポーツセンターとして協会と一体になり地域での障害者スポーツの振興を推進した。 ②「東京都障害者スポーツ振興計画」をも踏まえ、平成29年度に策定した「東京における障害者スポーツ振興ビジョン」の実現に向けて引き続き計画的に取り組んだ。 ③改修工事のため平成30年4月から平成31年5月までは仮施設の調布庁舎で運営し、引越・開設準備を経て、6月30日から改修後の国立施設での運営を開始した。徐々に利用者数が増加、11月には概ね開設前の同月標準に達した。なお、2月29日からは、コロナ感染防止対応の為、休館に入った。
	職員の資質向上	①利用者への質の高いサービスとニーズに沿ったサービス提供を行うため、職員研修実施要項に基づき全体研修(「オールスタッフミーティング」「伝達研修、メンタルヘルス4つのケア」「働き方改革法案骨子)」を実施。 ②職員の能力開発と意欲の向上を図る資格取得を奨励。初級障がい者スポーツ指導員養成講習会に3名参加、資格を取得した。またトランポリン研修会に2名が参加した。
	安全対策・環境配慮等の実施	安全対策については、施設全体の建物管理を実施する(株)東京スタジアム、及び近接の武蔵野の森総合スポーツプラザと共同で「合同自衛消防訓練」を5月に実施した。また、施設内では職員の避難路点検を労安と連携し季節単位で実施した(調布、国立双方にて実施)。改修後、国立においても多摩支所合同で防災訓練を実施した(12月)。 環境配慮等については、 ①建物の衛生的環境を確保するために、事務所等において二酸化炭素等7項目について、空気環境測定を実施した。 ②改修後、工事等で減少したつつじの植え込みを回復し、枯れた樺の周囲を芝生化により緑被率を維持した。また、新設のテラスに青木のポットを増設し(23個)緑化に努めた。改修により館庭を含めて全面LED化を実現。
利用者支援のさらなる充実	利用者の状況	平成31年度の利用者総数は109,365人で、平成29年度と比べると35,303人増加した。増加の原因は、改修によりプール、宿泊棟、レストランなどの全施設が再開されたことである。また、利用者の長く馴染んだ国立へ戻り、アクセスなどが改善されたことも大きい。センターも「利用者の声」を反映し、使い勝手の改善や魅力ある事業を再開してサービス向上に尽力した。
	利用者ニーズの把握と対応	①平成31年度東京都多摩障害者スポーツセンター施設利用に関するアンケート調査を実施し、利用者のニーズを把握するとともに、サービスの質の向上を図っている。有効回答数446件で、総合評価では96.7%の方から十分・ほぼ十分という回答をいただいた。 ②総合スポーツセンターと合同の利用者の声調整委員会(社会福祉士、弁護士、障害者からなる3名)を設置し、館内に投書箱を設け、利用者からの苦情や要望等(176件)を把握し、各センターに寄せさせた苦情等について四半期毎に協議し、センター運営の改善に努めた。
	利用者の特性を踏まえた適切な利用者支援	幼児から高齢者まで、利用者の障害の種類や程度、並びにライフステージ・ライフスタイルに合わせたスポーツ教室やレクリエーションプログラム、大会やイベント、講習会など多彩なプログラムを53事業用意して取り組んだ。 ①ジュニア(幼児)世代にスポーツを取り組む機会と場所の提供を行い、今後スポーツに取り組むきっかけづくりを目的にジュニア対象教室を充実した。3事業で延べ17日間実施し、延べ272名の参加者があった。 ②重度障害者対象教室では、新規で「のびのび体操クラブ」「のびのびプールのひろば」の2事業を実施し、延べ9日間135名の参加者があった。 ③高齢障害者に対しては、日常生活活動動作の向上を図るため介護予防支援教室「コツコツ若返り体操」を実施し、延べ9日間、97名の参加者があった。
地域振興の充実	障害者スポーツセンターの特徴を踏まえた運営の推進～障害者専用スポーツ施設としての機能充実～	①利用者が、安全に、公平に、有意義な利用ができるように、センター最大の特徴である各施設へスポーツスタッフを「全施設に全時間」配置して、障害の種類・利用目的・程度、利用目的、運動経験、性別、年齢等を踏まえた日常的なスポーツ支援をしている。 ②医師、理学療法士、管理栄養士が専門的な立場から健康管理や運動内容等について106名の相談希望者にアドバイスを行い、安心してスポーツ等に取り組んでもらった。 ③当センターのスポーツスタッフが、個々の障害種別や程度に応じた運動指導や運動プログラムの作成を行い、安全で効果的スポーツ活動への取り組み支援を76名の利用者に対して行った。
	関係機関・団体との連携の強化	障害のある人が、地域の身近な場所でスポーツに取り組むことを推進するために、協会が進める障害者スポーツ地域開拓推進事業と一体的に行うとともに、多摩地区の市町村や社会福祉協議会、スポーツ推進委員協議会などの団体とも協働して行った。5月には調布庁舎最後のイベントとして味の素スタジアムで開催した調布市体育協会主催の「調布市民スポーツまつり」と同日にTAMAスポーツまつりを実施し、その中でもバラスポーツ実施競技であるテコンドー教室を実施し、ゲストとして選手を招いてデモンストレーション及び体験会を行いスポーツまつり1日で865名の参加者があった。大規模改修工事後に、国立市の体育協会の「くにたちファミリーフェスティバル」では、車いすスラロームを実施し138名に参加者があった。まちの振興課とは「LINKくにたち」に参加しショートテニスやボッチャ体験ブースを担当し811名の体験者があった。他にも東大和市スポーツ推進委員協議会と共催で「みんなでバドミントン in 東大和」を実施し、健常者と障害者が同じチームメイトとして団体戦を行った。 また、当センターの認知度向上と関係機関との連携促進を目的に実施した「事業見学会」を19回開催し、医療・福祉・教育機関などから380名の参加があった。これにより、これまで当センターを利用していなかった障害者の受け入れに繋がった。
地域振興事業の充実	センター事業、地域振興事業でスポーツ・レクリエーションなどで活躍できる人材を養成するために、センターのスポーツ教室を題材として「スポーツボランティア講習会(入門編・体験編)」を実施し、延べ23名の参加者があった。また、ボランティアや施設・団体職員を対象とした「フォローアップ講習会」も実施し、延べ61名の参加者があった。「初級障がい者スポーツ指導員養成講習会」では43名の受講修了者があり今後積極的に参加することに期待したい。センター事業や、地域振興事業において積極的に障がい者スポーツ指導員を活用した。	